

医学の道で、ある素晴らしい縁があり私はこうしてハンセン病を追いかけている。その不思議な巡り合わせの中で、人の声の重さを知り、人の死に心を震わせ、人間について学ぶよるこびを享受している。この本に出会って、いのちについて、神様について、考えさせられることが多かった。それは今まで私がハンセン病を考える上で軸にしていた人権という視点を悠々と超えるものであったことは間違いない。

本書を手にしてみると、神谷先生の生に対する洞察の深さにひたすら感服するばかりであった。「いのちのもろさ、はかなさにおいて、私たち人間はみな結ばれている」(63頁)という謙虚な自覚の上で、「なぜ私たちでなくてあなたが？」と悩み抜く先生の姿が、本全体を通して浮かんでくる。そしてそのような葛藤を抱えながらも、先生の父親や恩師、他の医療者そして患者らと繰り返し返された丁寧なやり取りの記録は、読んでいて心を打たれた。女として、医師として、迷い悩みながら道を選んで歩み抜いた神谷先生の生涯に、心から拍手を贈りたい気持ちになったのだ。

「ここに至るまでの彼の苦しみ。人生は彼らにとってあまりにも残酷だ。それなのに私はぬくぬくと自分の息子たちの身の上の心配などしている」(249頁)

この一節に、求道者であり実践者である神谷先生ゆえの苦しみがにじみ出ていると感じた。このような両面性から目を背けたくなる気持ちには、社会に何かしらの貢献をしようと思う人であれば自分自身に対して抱く疑念である。心から平和を願う気持ちを大切に守りたいと思う反面、利他主義や行動主義が強調される現代で、自分の幸せを見つめにくくなることは悲しいことである。そして時に、私たちはどのように自分で進むべき道を選び取ればよいのか途方に暮れることがある。だが、この悩みに対して神谷先生はある一つの応答を残しているのだ。

「しかし、Mよ、お前に求められていることを逃げてはならない。妻としてのつとめ、母としてのつとめ、主婦としてのつとめ、そしてお前自身へのつとめ——そのどれもおろそかにしてはならぬ。しかもその上、永遠の相のもとに時を観ずること。」(207頁)

きつと、神谷先生は自分自身にそう言い聞かせているのだろう。

将来医師になる者として、病める人と健常な人で一体何が違うのか、という神谷先生が提示する問いは常に心にとどめておかなければならないと思う。というのも本書を読んで、医師になり人々の健康に貢献したいという私の思いが、もしかしたら病者を患者たらしめているのではないかという危険を孕んでいることに気づかされたからである。

もし、あらゆるいのちの価値を平等に扱い他者のあるがままを受け止めることがで

きるような、それこそ神様のような性格を人間すべてが持っていたとしたら、どのような外見・中身の差異でも意識すらしない(そしてそれは実際、神様の為せる仕事である)だろう。人間が人間らしく考えることができるのは、神様ではない人間がいのちの境遇に不平等を見いだしてしまうからである。神谷先生はそこにも目を配っている。ハンセン病者というとしてつもない人格者ばかりであるという思い込みが私の中にあったが、神谷先生は愛生園の入所者にみられる精神病患者への差別を気にかけていた。これは私にとっては衝撃的だった。病気と健康という視点をもっているということが何を意味するのか、私たち人間はもつと謙虚に見つめなければならぬのだ。

つい昨秋のことになるが、私は大学で解剖学実習を朝から夕方過ぎまで黙々とこなしていた。目の前に横たわる精緻精巧に設計された人という存在に向き合った、驚きに満ちあふれた日々月間だった。私は勉強に遅れないようにと、今日同定した構造物のノミナの暗記と明日の実習の予習をして、厳しい科目になんとか食らいついていた。私が本書を手を取ったのは、解剖学の試験を終えて冬期休暇に入った頃のことである。日々のことを必死にやっている時は、どうしても気づくことができないのかもしれないが、本当にふとした瞬間に、「献体して下さったあの方はどんな人生を送ってきたのだろう、どんな声をしていただろう」という感情が浮かび上がって、そうしてずっとそのことばかり思いを馳せて眠れなくなることがある。

「万霊山に上」(264-268頁)を読んで、私はそんな自分自身の心境のゆらぎに、ようやく触れることができた。いつかもし追体験ができるならば、万霊山に座ってそこに眠るたくさんのいのちやきれいな自然に包まれて、人間とは何かということを考えてみたいものである。

神谷先生の、「死の世界ではみな平等で、天国行や地獄行などという区別もない」(267頁)という考え方に、私は賛同する。そしてだからこそ、私は平等ではない生の世界をまだ堪能したいと思える。医師という自分の与えられた使命に、私はどこまで向き合えるだろうか。